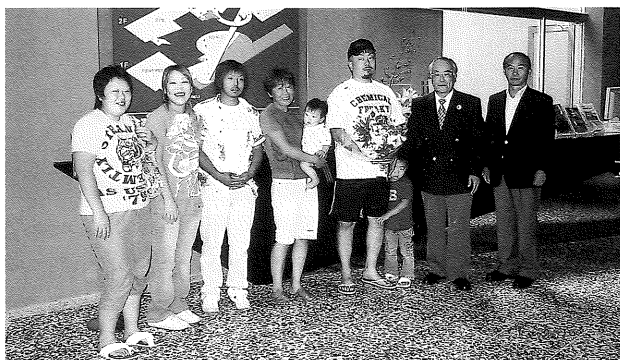


博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報



有料入館者15万人目の櫻井さんご家族



金鷄金山の露天掘り跡を見学



須玉金山金山のズリ場を横切る



丹波山金山のムジナ沢で説明を聞く

本年もよろしくお祝い申し上げます

2006年、皆様が新しい1年の幕開けを晴れやかな気持ちで迎えられたこととお喜び申し上げます。

博物館は開館満9年目、まもなく開館10年目へ突入します。町民の皆様、地域のための博物館、そして誰もが胸を張って自慢できる学術・観光施設であるという、多面的な役割を果たせる飛躍の年とも考えております。

去る9月18日には、有料入館者15万人目のお客様をお迎え出来ましたことも、新年早々皆様にお知らせしたいニュースの一つです。

15万人目入館者という幸運に巡り合わせた方は、富士宮市にお住まいの櫻井さんご一家。15万人目というキリの良い数と、さらなる飛躍の第一歩への大きな節目として、当館にとっても特別な意味合いを持ってお迎えできました。そんな気持ちを込めながら谷口館長から花束、そしてかけつけた千頭和身延町教育長から記念品が贈呈されました。櫻井さんご家族は満面の笑顔でこれらを受け取ってくださいました。ミュージアムショップ壁面に飾ってある1万人ごとの記念入館者の額もこれで16枚目となりました。

「砂金採り体験がしくて博物館に来たんです」と語ってくれた櫻井さんは「館長さんの説明の中で金山衆の菩提寺が北山本門寺だということを聞いて、自分が住んでいる所と近いのでなんとなく縁を感じずにはいられませんね」ともお話しされ、館内見学と砂金採りを楽しんでくださいました。

スタッフ一同、よりいっそう館の発展に邁進して参りますので、さらなるご理解とご協力をいただきたく、どうぞ宜しくお祝い申し上げます。

湯之奥金山博物館の役割

身延町の玄関口であったり、その活動は多彩です

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長 谷口 一夫

-4「甲斐黄金村・湯之奥金山博物館」は、どのような役割をもって活動しているか、今回はこの話を致します。私はこれまで「博物館は地域活性化の拠点」として位置づけ、活動を推進してきました。そうですね、博物館活動は色々な役割をもった想像以上に多彩な場といえます。

戦国時代～江戸時代初期における

甲斐金山（湯之奥金山）のガイダンス館です

日本の産金は8世紀に宮城県涌谷の「黄金山産金遺跡」（国史跡）で始まり、16世紀初頭になって金鉱石からの金山採掘が加わります。

その初源的な金山が「甲斐金山遺跡・黒川・中山金山」（国史跡）なのです。言うまでもなく中山金山は湯之奥3金山（中山・内山・茅小屋）の一つで、そのガイダンス館が金山博物館です。ここは金山の歴史・技術が総合的に学習でき、そして体験できる日本で唯一の博物館です。生涯学習の場として子どもも大人も楽しめ、多くの皆様が知的好奇心を満たしております。

有料入館者は15万人を超え

昨年末15万4,745人目を迎えました

これまでに有料入館者数は15万人（17年9月18日）を達成（表紙写真）し、昨年末の最終開館日（17年12月27日）までに15万4,745人になっています。

今年の特徴を見ますと、開館以来、最高の来館者数を記録する月が出るなど、地味ながら確実に来館者を増やしているという状況にあります。一人のお客さんを大事にするところから始まっています。

金山博物館は身延町の玄関口の一つです

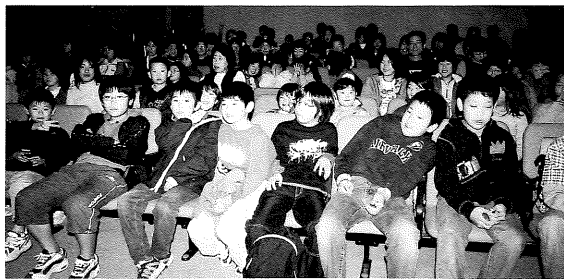
世界各地へ行っても、観光で先ず行くところは「博物館や美術館、遺跡や土産品店」です。役場ではないんですね。ここでの印象がそのまま町の印象に繋がります。観光立町身延にとって、金山博物館が高いレベルで運営されなければならないことは言うまでもありません。日常的に少数精鋭で来館者対応をしていますが、職員が創意工夫と努力で来館者増に繋げているの

が現状です。毎年身延町の総人口以上のお客さんをお迎えしております。

子どもの居場所・子ども向けプログラム

金山博物館は積極的に「子ども向けプログラム」の実践をしています。土日祝日はもとより夏・冬・春休みなど、いつでも受け入れていきます。また「子ども金山探険隊」などでは「子どもの科学する芽」を発見してもらうために企画しています。夏の砂金掘り大会も年々充実し多くの小中高生、一般の参加があります。また有名私学交流砂金掘り大会には東西の私学の雄「兵庫・灘中高、東京・開成中高、山梨・駿台甲府中高、山梨学院中高」の4校が参加（毎回1～2校増やす計画）で開催されていますが、彼らが社会に出た後も、金山との繋がりを継続したいという意図があります。平成元年からの本調査に参加した東京大学の学生たちも、大学に残ったり公務員になったり進んだ道はそれぞれですが、自分の第2の故郷は金山ですと言って、家族連れで博物館を訪ねてくれることもあります。良かったなとしみじみ感じます。

親子映画観賞会も同じ発想です



先般32回目の観賞会を開催しましたが、これは平素の館閉館後や水曜（休館日）の休みを返上して開催していますが、親子のこの思い出は子供にとって決して忘れるものではありません。

自分が親になった時、今度は必ず子どもを連れてやってくるでしょう。こうした利用者の数は冒頭の15万4,745人の数字には入っていませんが、真剣に取り組む職員が居ればこそできるプログラムです。この博物館運営のレベルは落とせないと考えています。

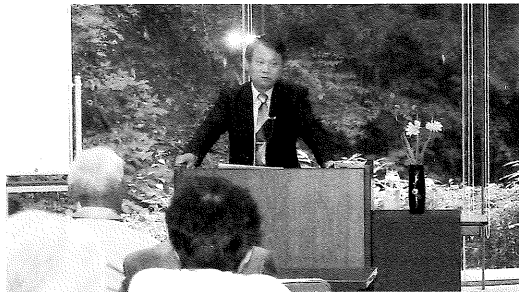
活動報告

平成17年度公開講座（第41回～45回）

～湯之奥金山とその周辺～河内（峡南）の原風景を追って～

10月から始まった平成17年度公開講座ですが、好評のうちに第43回目まで終わることが出来ました。

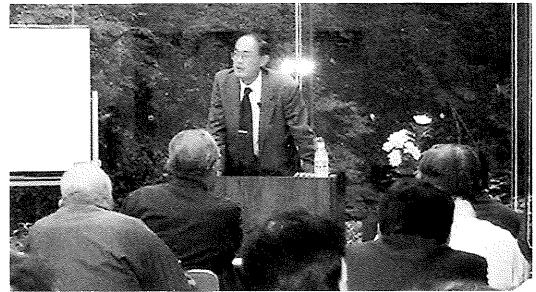
今年度初回の公開講座は「戦国時代に河内の山に生きる」という演題で、信州大学教授の笹本正治先生(当館運営委員)に飾っていただきましたが、県内外から多くの聴講者にお集まりいただきました。先生の歯切れの良い話ぶりと、また、時折交える冗談に会場から笑いが起こったりと、聞くものを惹きつける充実した講演会で、聴講者の皆さんからは「いいお話を聞かせていただきました勉強になりました。」という感謝の言葉をたくさんいただきました。



笹本正治先生 (10月)

また11月の第42回目の講座でお話くださったのは前山梨県史編さん室長の秋山敬先生でした。「穴山氏と河内領」という演題のもと、秋山先生は文献史学の立場から、郡内、河内、国中などの地域呼称の発生がいつからあったのか、穴山氏の系図を文献から人物特定をするなど、『甲斐国志』『勝山記』『太平記』『王代記』など多くの史料を検証し、穴山氏と地域の関係が作られた背景をお話しされました。文献資料に対する秋山先生の緻密な研究、そして洞察力や観察力によるお話は、ひいては文献の読み解き方を提示するものでしたが、穴山と河内という多くの人が興味を持つ分野であることも手伝ってか、講義終了後には活発な質疑応答が交わされ

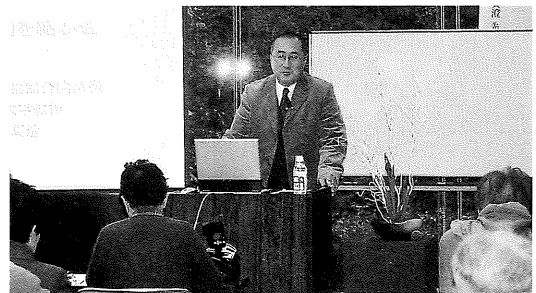
ました。先生は聴講者から投げかけられる質問に丁寧にお答えくださり、皆も興味深く耳を傾けていました。



秋山敬先生 (11月)

そして通算43回目にあたる12月の講座では、身延山大学教授の望月真澄先生に「甲斐と駿河を結ぶ道」という演題でお話しいただきました。

大学で教鞭を取り、また僧侶として仏教に関わるお立場の望月先生は、金山衆の菩提寺である北山本門寺との接点やさらなる情報の研究を重ねておられ、歴史の現場は自分の目で確認する信念から、先般、湯之奥中山金山にも登りそこに残された石塔群の前でお経を上げてくださったという、当館としても非常に有難く嬉しいお話を織り交ぜながら、古来から地域の重要な交わりとしての「道」についてお話しされました。



望月真澄先生 (12月)

今後の日程は1月に山梨大学教授・齋藤康彦先生、2月には平川南先生のご講演をいただきます。続く公開講座もあと2回となりましたが、多くの皆様方のご聴講をお待ちしております。

通算回	期日	演 題	講 師
第44回	平成18年 1月14日(土)	河内の産業と経済の歩み	山梨大学教授 齋藤康彦氏
第45回	2月18日(土)	古代の甲斐国	歴史民俗博物館長・山梨県立博物館長 平川南氏

場所：湯之奥金山博物館 多目的ホール（JR身延線 下部温泉駅下車：徒歩3分）
時間：午後2時～4時（※聴講無料）

秋の遺跡見学会【金鷄金山(長野 10月16日)、丹波山金山(丹波山村 11月19日)】

今年度の遺跡見学会は、郷土に残る貴重な歴史遺産を自分の目で確かめるとともに、武田領内で稼業された金山遺跡を町内に限らず広範に見学し、個々の金山の持つ特質を学ぶという趣旨のもと、全3回にわたり開催いたしました。6月の長野県川上村長尾金山遺跡見学会から始まり、多くの皆様のご参加とご協力をいただき、無事に終えることが出来ました。

10月16日は長野県・金鷄金山遺跡、そして11

月19日は、丹波山村教育委員会との共催で丹波山金山遺跡見学会を開催いたしました。

丹波山金山遺跡見学会では、山梨学院大学教授の十菱駿武先生(当館運営委員)に講師をお願いし、また丹波山村教育委員会の方々や村の皆様からも温かいご協力をいただき、非常に有意義な良い見学会となりました。(関連記事6、7ページ)

博物館駐車場のイルミネーションはご覧になりましたか? 12月～2月末

昨年の好評に引き続き、今年も地元・しもべ温泉郷の湯町青年部メンバーによる夜間イルミネーションが12月から始まっています。

近年、各地でこうしたイルミネーションが話題を呼んでいます。この身延町内にも話題のスポットがいくつもあります。西嶋地区は約30軒の民家で行われテレビなどでも取り上げられる程なのでご存じの方も多いいことでしょう。そして市之瀬地区、この下部湯町地区も評判を呼んでいます。

下部湯町地区は、昨年よりも電飾を大幅に増やし、リバーサイドパークの船型木造遊具・わ

んぱく丸をメインに、約7万個の電球が公園内の樺や楓を幻想的に飾っています。白色電球を基調に飾ったこのイルミネーションはしっとり落ち着いた印象を与えます。

点灯時間は毎日夕方5時～10時まで、2月末まで楽しんでいただけます。

空気が冷えて澄んでいるこの時期だからこそ、なおのこと映えるこの輝きですが、お近くにお越しの際は是非ご覧になってください。そして町内イルミネーション巡りと洒落込んでみてはいかがでしょうか。



近くでご覧になっても綺麗ですし、温泉郷道路側からなら全体を見渡すこともできます。

特別展「魅惑の海底写真展」終了

11月20日(日)～27日(日)

地元にお住まいの佐野美麗さんのスキューバダイビング写真展「魅惑の海底」が一週間の開催期間を好評のうちに終えました。

海の生き物や海底にある現役郵便ポストなど、普段見かけないものも多く撮影されており、地元新聞紙上でも紹介されました。

開催のお知らせを聞いた多くの方がご来場くださいましたが、皆興味深そうに、海底の不思議な世界に見入っていました。

企画から準備、そして開催中も事務のほとん

どを一人でこなした佐野さんは「初めてのことばかりで思ったより大変で疲れたけど、楽しくできました」と感想をいただきました。



長野県 金鷄金山遺跡

10月16日(土)



長野県茅野市にある金鷄金山遺跡は、中央線青柳駅向の大沢集落から通じる金沢林道の道程7.5km及び、金川支流北の沢の源流部一帯の標高1,360mから1,455mにかけて分布しています。戦国時代には操業が始まり武田

氏滅亡後も操業が継続されていたことが推定され、地元では金鷄山及び千軒平と呼称されています。現地には、つるし掘り（＝露天掘り跡）から始まり、坑道、碑石、焼窯、墓石など、戦国期から近代にかけての遺構が混在していますが、非常に良い状態で残っています。通常、遺跡は登山を伴うケースが多いのですが、山中にありながらも林道脇の開けた場所に立地しているため見学のしやすい遺跡であるという点は珍しいとさえ言えます。



林道脇の「つるし掘り跡」入り口。他の遺跡と比べて平坦。

『金澤村史刊行会（1992）』や『諏訪郡諸村並旧蹟年代記』、また古い史料では『御用部屋日記（高島藩記録・1665）』などに金鷄金山についての記述が散見出来ます。また『大納戸日記（高島藩記録・1676）』には、「金澤山にして金掘り申したき由にて上方より山師共下る」とあり、宝暦4年（1755）には、今井賤右衛門が金沢山の金山を掘ることを願い出たが取り上げられなかったとあります。江戸時代に入っても何回か採掘が試みられ、その操業は断続的であったことが伺われますが、このことは多くの

金山において見られる共通点と言えるかもしれません。

稼業当初は地表付近の風化残留鉱床を発掘した露天掘りが主体で、現在も遺跡内に残る多数の大規模な掘り鉢状の窪みは「つるし掘り跡」として見る事が出来ます。また、1800年代半ばになってくると、坑道を開削するようになりますが、現地には、盛一次郎という人物が開坑したと言われる“弁天鋪”や、他にも“鶴坑”、“亀坑”という名称の坑道が幾つか残っています。

金鷄鉱山の鉱床は、鉱脈の露出がないため直接観察できませんが、いくつかの鉱脈からなり「鉱脈は鶏のような形をしていて、そのために金鷄鉱山と呼ばれるのだといい、今までに片羽根だけ、またくちばしや足の部分を掘っただけで、もう一方の羽根や胴体部分は残っている」という伝承も残っていますが、鉱石中の金は0.01-0.05mmという微粒で肉眼では認めがたいものがほとんどです。

鉱石の品位について文献では「或ものは含金十萬分の一・二八（12.8g/t）なるものあり」という記述が見られますが、当時の作業やその方法を考慮すると、特に高品位というわけではなく当時の一般的な金鉱の品位であると言えそうです。

なお、白色石英に片鱗上の青緑色のクロム白雲母（別称・マリボサイトまたはフクサイト）を伴い、美しい緑白色をしているということは金鷄金山の鉱石の特徴として挙げられます。

さて、過去の文献を見ていくと、1800年代中頃の操業の様子と人物について「天保9年辰年（1838）旧仙台藩士一次郎ナルモノ来テ請負稼ス漸々復古ノ勢ヲナセシカ行業スルヲ終ニ四年間事故アリテ領主諏訪藩ヨリ禁止セラレ再ヒ廃業セリト云フ」という記述が出てきます。また、天保11年（1840）7月9日の月番日記（高島藩記録）に「金沢山へ飯田角左衛門参り、11月12日に山吹金を吹かせ」、13日には「山吹金正味二十四匁五分（109g）千野茂左衛門差し出す」とあります。つまり、金の生産量に対し、一定の運上金を取って請負稼業をさせていたことが窺えるわけです。これほどまでに盛んに稼業したものの、詳細は分かりませんが大きな事故が

あり、そのため大勢の人が亡くなり、弘化2年(1845)に諏訪高島藩により稼業中止命令が出て廃業になったことが述べられています。



草むらにひっそりと建つ「天保の墓」。

写真のように、金鷄金山現地には「天保の墓」があります。現在そこに建っているのは1基ですが、この事故の際に亡くなった人の墓と考えられています。関係者によるとこの場所にかけては20数基あった墓石が何者かに持ち去られてしまったようです。

なお、盛一次郎が稼業したことは現在も金鷄金山の不動明王碑にある碑石のない古い台座石に記録されています。

その後、嘉永6年(1853)には金鷄鉱山北西にある高島藩御用山の鉛山鉱山役人、平原与一



不動明王碑。金鷄金山遺跡は各所に説明板がありわかりやすい。

左衛門らが、金鷄鉱山を見回っており、稼業が再開されました。

近代に入ると明治新政府は鉱業振興の政策から全国諸鉱山の点検をします。明治6年(1873)年、金鷄金山もその点検の一つとして役人が訪れていますがその後、昭和25年ごろ以降の稼業記録は認められずに現在に至ります。

金鷄金山は総合的な学術調査が行われておらず、鉱山道具も発見されていませんが、遺物としては唯一、明治31年(1898)に大水で金川に流出したとされる上下そろった挽き臼があり、現在は地元の金沢小学校に保存されています。なお、同校にはセリ板2枚も保存されています。

参考文献：「長野県茅野市金沢金鷄鉱山の歴史と地質鉱床：五味 篤(1998、3月)」「日本鉱山史の研究：小葉田 淳(1968)」「信州金澤の歴史：金澤村史刊行会(1992)」他

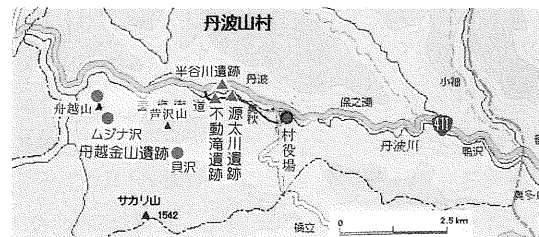
丹波山村 丹波山金山遺跡

11月19日(土)

丹波山村南西部の舟越金山(1,021m)、サカリ山(1,542m)と芦沢山(1,271m)一帯にある舟越金山遺跡と、丹波川の河岸段丘奥秋の源太川遺跡、不動滝遺跡、半谷川遺跡などの砂金採掘遺跡をまとめて丹波山金山遺跡と呼びます。2001年11月、山梨県史編纂中世部会の踏査によって、丹波山村舟越山中で鉱山臼、そして丹波川の河岸段丘に砂金採掘遺構が発見されたことを受け、丹波山村教育委員会では観光資源・文化遺産保存活用のため、新たな金山遺跡の発見に3年計画の丹波山金山遺跡学術調査団を編成しました。2002年度は舟越金山遺跡マルケバ地区・ムジナ沢地区と源太川遺跡、2003年度は舟越金山遺跡八本木平地区、芦沢山地区、不動滝遺跡、2004年度は舟越金山遺跡ムジナ沢地区、貝沢地区、半谷川遺跡、半谷川金穴の調査を行いました。

丹波山砂金採掘遺跡の調査は、北海道今金町

美利河遺跡・岩手県大船渡市猪川館跡につぐ、全国でも稀な例であり、同時に広い範囲の山川に散在する鉱山遺跡で、武田氏時代の甲斐金山の謎を解く重要な遺跡の一つとして注目されています。



調査の結果、戦国時代から江戸時代にかけての鉱山用磨り臼・挽き臼・磨り石などが確認されていますが、これらの臼の特徴は、奥三河の津具金山をはじめ、信濃川上村長尾金山、甲斐国内では黒川、湯之奥のほか、大月の金山金山、安倍・梅が島金山など武田氏の支配領域内の金山遺跡に多く見られるものです。

丹波山村で黄金が産出することは古くから知られており、安土桃山時代(1594・文禄3年)に甲斐国を統治していた浅野氏が発給した文書

に「丹波山のうち山河芝間、黄金前々のごとく掘るべき事」として、丹波山の金掘りたちに「前々の如く」黄金採掘の許可がなされていることから、少なくとも浅野統治以前から、金山の操業が行われていたことはもとより、文中の“山河芝間”を見るに、丹波山で山金、川金、芝金が採掘されていたことが分かります。



十菱先生の説明を受ける参加者

また江戸時代後期（文化3-11年）の『甲斐国志』には「古ハ黒川山ヨリ丹波ニ至ルマデ沙金多く出、イマ山中金掘りシ穴アリ。其金掘者後里ニ出テ農家トナル。文禄ノ此迄モ金出シニヤ。保野瀬村ノ百姓浅野ノ印書一通ヲ所持セリ」とありますが、この印書の原本は失われ現在は写しのみが残っています。

丹波山周辺には、戦国時代からの操業が考えられる金山が大小多く点在しており、特に隣接する黒川金山とは、泉水谷の深い溪谷を挟んでいるとはいうものの、史料にも「黒川ヨリ舟越へ罷出金掘」という記述が見られること、文書や鉱山道具や鉱山臼の類似性などを合わせ考えると、両金山間はほぼ一体となって経営されていた、もしくは密接なつながりをもっていたものと容易にうかがわれます。その関わりは黒川金山以外の竜喰・牛王院平金山などの周辺金山にも及んでいたのではないかと思います。また、丹波山村の「舟越」より罷り出てきた金掘り18人が「上ノ原用水」の普請を手がけており、当時はまだ「舟越」なる場所に相当数の金掘りたちが居住していたことも分かりますが、金掘りたちが金山を下りて用水工事のような土木事業に従事することがあるということは一般的にも良く知られています。

塩山市・田辺紀俊家に伝わる慶長8年（1603）の「於曾御蔵入丑之年払」がありますが、幕府が成立した年代のもので、幕府の代官が年貢と



風化した鉱床の柔らかさを確認

して納めさせた米をどのように換金したかという内容のもので、文書中には「こいし金（碁石金）」という用語が頻出しており、同文に「多波山金（丹波山金か?）」という用語が出てきます。丹波山舟越金山のほか、芝金や砂金など丹波山村全体で産出した金で作られた貨幣ということで地名に由来して“多波山金”と名づけたものなのかどうかは、史料の少ない現段階ではなかなか判断しきれませんが、興味深い史料であると同時に、慶長8年の段階においても丹波山の産金量はそれなりにあったことが考えられます。

今回見学場所に選定したムジナ沢地区は片道約1時間半ほどの山中で、途中難所もあり案内がないと難しい場所ではありますが、源太夫という金堀がこの地を採掘していたという伝承があることに地名の由来がある源太川遺跡や、グリーンロード沿いのやまぶき橋のたもとにある不動滝遺跡は初めての人でも分かりやすい場所で、人工的な窪地が多数あり、全体として旧河床の砂礫層を採掘した芝金（古い川床の芝地にある砂金）の採掘遺跡であることが分かります。

また、丹波川北岸の河岸段丘の半谷川地区で、不動滝地区と類似する採掘坑跡が発見されていますが、半谷川には鎌倉時代に日蓮聖人が泊まったという伝承も残っています。

なお、丹波川での砂金採集は戦前まで盛んに行われており、砂金採掘の道具は旧家や丹波山村郷土民俗資料館や、国立民族学博物館に保管されています。（学芸員 小松美鈴）

参考文献：「丹波山金山遺跡第一次学術調査概報－丹波山金山遺跡学術調査団－（武田氏研究第27号）」「丹波山金山遺跡第3次調査略報－丹波山金山遺跡学術調査団－」「丹波山舟越金山と二、三の考察－萩原三雄－（山梨県史研究第10号）」「甲斐黒川金山」、「文献に表れた甲州金と現物貨幣－西脇 康－（金山史研究第5集）」丹波山村観光パンフレット、他

館からのお知らせ

伝統技術を学ぶ～昔の生活用具を作ってみよう～ 参加者募集

わらじ・草履作り教室

昨年から開催している体験事業、「伝統技術を学ぶ」。不自由なく何でも簡単に手に入る環境にいる私たちにとって、生活道具や遊び道具をゼロから作るというのは意外に難しいことかもしれません。

今回はわらじ・草履作り。参加ご希望の方は博物館までお申し込みください。

期 日：平成18年2月12日（日）
午前10時～午後2時まで
場 所：多目的ホール※昼食持参
講 師：生松一男氏（町内在住）

親子映画観賞会 今後の予定

今回で32回目を迎える「親子映画観賞会」。周知範囲が広がったこともあり、前回の「ハウルの動く城」では約70人の方にご参加いただきました。今後もアンケート結果を反映した作品や名作などより良い作品を選定していきますので、多くの方のご観賞をお待ちしております。

今回は1月と、3月の春休みに開催いたします。
平成18年1月21日(土) 午後6時～
平成18年3月29日(水) 午後1時～
※上映作品未定・観賞無料

博物館日誌 (平成17年10月～12月)

12月												11月												10月																			
28	27	26	23	21	17	10	4	2	1	30	29	28	27	25	23	22	20	19	14	12	11	7	5	1	31	28	20	18	16	15	8	7	4	3	1								
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日								
(水)	(火)	(月)	(金)	(水)	(土)	(土)	(日)	(金)	(木)	(水)	(火)	(月)	(日)	(金)	(木)	(水)	(日)	(土)	(金)	(土)	(日)	(土)	(金)	(木)	(水)	(日)	(土)	(金)	(土)	(日)	(土)	(金)	(木)	(水)	(日)								
28日～翌年1月1日まで年末休館	仕事納め	大掃除・門松作り	スカイパーフェクトTV、取材撮影	館内床清掃	親子映画観賞会	第43回公開講座 講師・望月真澄氏	第11回富士川流域王国会議	下部温泉イルミネーション準備・点灯	郷土史研究会講演会 平山 優氏	クリスマスツリー飾り付け	展示資料・収蔵資料燻蒸処理完了。	「ふるぶ山梨」取材	館内ガラス清掃	身延東小4年遠足、「ふるぶ山梨」撮影	展示資料・収蔵資料燻蒸処理のため搬出	写真展最終日	身延南小3年遠足	勤労感謝の日、振り替え開館。	甲府・南西中 県内巡り	南三陸町教育委員会中山金山遺跡登山	魅惑の海写真展「27日迄」	県民の日、常設展示無料開放。	丹波山金山遺跡見学会	身延北小3年 遠足	出張砂金採り（於 しもべ道の駅物産まつり）	下山中 県内巡り	第42回公開講座・講師 秋山 敬氏	出張砂金採り（於 しもべ道の駅物産まつり）	菊の花、入り口に設置	親子映画観賞会	大月東中ふるさと巡り。丹波山金山下見	身延山大学生ボランティア研修	身延山大学生ボランティア研修	下部小2年遠足	小笠原小4年遠足	出張砂金採り（於 小瀬物産まつり）	長野県・金鶏金山遺跡見学会、	第41回公開講座・講師 笹本正治氏	第10回富士川流域王国会議	山梨日日新聞取材	毛無山確認調査、読売新聞取材	湯田小 秋の遠足	衣替え



編集後記

毎年、博物館入り口に飾る門松は、お客様を暖かくお迎えできるよう心をこめたスタッフの手作り。竹がちよとずれたり不恰好なところがあったりしてもそれはご愛嬌。今年のお正月も大勢のお客様を迎えてくれた門松です。そして「福」を博物館にも迎えてくれるように。さて、新しい1年を迎え巡らせる思いは人それぞれ。節目、節目は新しいことを考えたり、区切りをつけたりするいい機会。未来への明確なビジョンを描いての行動はなかなか難しいものですが、より高い目標に向かって羽ばたける1年にしたいものですね。

博物館だより 第35号 平成18年1月10日

〒409-2947 山梨県南巨摩郡身延町上之平1787番地先 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館
博物館HPアドレス http://www.town.minobu.lg.jp/local_minobu/kinzan/index.html